

価値の共軸をめざして

—'95年の組織実践を振り返って

始めに

この間われわれは、「前衛—大衆理論の実体主義」を問題にして、レーニン組織論的な「目的意識性と自然発生性」というパラダイムからのテイクオフを課題としている。レーニンの『何をなすべきか』で言われている外部注入論——「自然発生的で無知な大衆を、先進的な前衛が指導する。」といった閉塞したドクトリンではなく、廣松渉『弁証法の論理』における *für es — für uns* 規制を回路に、共同体としての *Wir*（われわれ）と当時主体との相互共軸を課題にするというものである。

しかしそういう私自身、ワークショップでの提起後『弁証法の論理』を慌てて読みはじめ、論理上は納得した気持ちになっているものの、現実の組織関係や人間関係では、まだまだパラ・チエンできていないのが本音である。この前もある同志と話していて、「田畠と討論していてもゾレンばかりで、本音が見えてこない。」とか

いわれて、すっかり考え込んでしまったのである。

というのも、私はここしばらく街頭での情宣を通じて、討論していける対象を見つけていないのである。べつに努力を怠っている訳ではないのだが、思いが強い分だけ相手に語つていく言葉が一方的な押しつけになってしまったり、相手の問題意識に踏み込めていけないので。しかし、それに対しても今までなら例えばソフトに喋ったり、一方的に話さないとかいった技術的なノウハウ（当然その辺も問題ではあるが）に還元していた面もあったりして、なかなか解決の糸口を見いだすことができなかつた。

予め措定された「真理」を、対象に強制していく討論の在り様を、BUNDでは「スターリン主義的な組織観」として「八九事態」以降、主体的に乗り超えようとしている。私自身もそれに無自覚な訳ではないのだが、現実問題として価値の共軸を「生きた対象」との間に取り結んでいけないので。

もとよりこういった問題は、私個人の傾向に止まるものではなく、私と私をも含む、わがセクション全体の問題でもある。とかく私は自分にこだわってしまう傾向があり、「総括する」というと「私が至らない理由」をあれこれ羅列して事足れり、としてしまいがちである。——こういう傾向を私は「自己欺瞞と裏返しの懺悔主義」と呼びたい——

そういうルサンチマンな発想こそが、廣松流にいえば一定の歴史的・社会的共同体における「通用的(Geltend)」価値体系の一亜流にすぎないものであり、私は現状変革者たり、「妥当的(Gutig)」価値体系の宣揚者たらんと欲する者ゆえ、なによりも *Wir*（われわれ）がいつでも主語になりうる関係を構築していきたいと思っている。ともあれこの文章で目指すことは、レーニン主義的組織観（前衛一大衆理論の実体主義）を超えて、自由で学び・学ばれあえる開かれた組織建設をめざすべく、発想の転換を行っていくことである。

実際、昨年のわがセクションのサークルでは、サークル・メンバーの主体性を問題にして、生き生きした関係

を創造しつつある。そこでの私自身の関わりなども捉え返しながら、そこでの成果や不充分性を糧にして、パラ・チエンを成しながら、九六年の圧倒的な前進をメンバー一丸となつてかち取つていきたい。

一、サークルはだれのもの？

昨年わがセクションでは、おおよそ月一回のペースでサークルを開催することができた。サークル名を「アウフ・タクト」といい、オーケストラなどで指揮者がタクト（指揮棒）を振り上げた瞬間を指すのだそうだ。つまりここから始まる、このサークルから価値を発信していくこう！という意味である。なかなかいいネーミングだなと思うのだが、当初はその名前とは裏腹に、新しいメンバーも参加することなく、なにかワークショップの延長みたいな感じで、なかなか「価値を発信していく」ことができなかつた。

それを変えていくきっかけになつたのが、春のサークルでの死刑問題をめぐる討論であつた。サークルメンバーでAさんという、長く僕らと一緒に運動に関わっている友人がいて、彼と私が前から個別に話し合つてきたの中に、この死刑の問題もあつた。

Aさんは私との討論の際、「君達（＝BUND）は死刑に対して反対だけど、犯人に肉親を殺された人の気持ちをなにも理解していないじゃないか。」と言つていた。とかくAさんは、旧ソ連みたいなものとして、われわれの在り様を物象化しているきらいがあるので、私としてはそういった関係をえていこうという思いもあつて、

死刑問題をサークルで取り上げようと提起したのである。

昨年最大の事件であったオウム事件のようなおぞましき殺人などを見るとき、死刑の是非自身が揺らいでしまいそうだが、「目には目を」といった殺人を犯した人間は殺されて当然という発想は、われわれにはそぐわないものである。その意味では確かに彼の言う通り「左翼だつたら死刑に反対するのが当然」という雰囲気はわれわれのなかにもあるのだと思う。しかしそういった「死刑反対」というフレーズなるものがあるのではなくて、あくまで人間解放を考えた時に、死刑という強制力によってしか秩序を維持していくことのできない社会ってなんだろう、とわれわれは考えるのである。

Aさんを交えた事前の打合せで（実は、前回のサークルの打ち上げと称しての飲み会である）、それなら死刑肯定派と死刑反対派で模擬裁判をやればいいじゃないか、という声があがり、さつそくその場で肯定派と反対派とを分けたのである。

しかしそのあとワークショップの会議で、肯定派にまわった仲間が「やっぱり自分はもともと死刑反対だし、サークルを面白くするだけの為に肯定にまわってもつまらない。」と反対派に「転向」してしまったのである。

こうなると模擬裁判といつても、Aさんが肯定派で、あとのメンバーが全員反対派というように、大糾弾大会の様相を呈してくる。それならいっそ模擬裁判という形式ではなくて、テーマを絞って討論をしていこうということになった。

そんな中で死刑囚の木村修治さんの手記で『本当の自分を生きたい。』という本があつて、この内容で討論を作つていつたらいいんじゃないか、という意見が出された。死刑肯定の世論でも、死刑反対運動の視点でもない、当事者の生の声がとても新鮮だつたし、こういった意見だつたら、きっとAさんも納得してくれると私は思った。

木村さんは「部落」民という差別の境遇のなかで多感な少年時代を過ごし、疎外感からそれを忘れるように

ギャンブルにのめり込み、その結果多額の借金を背負い込んでしまい、身代金目的の誘拐、そして殺人にまで至ってしまう。

逮捕され、裁判が進むうち、自分をこれまで疎外してきたものが「部落差別」であったことに気づき、同時に「麦の会」という死刑反対に取り組む組織のあることを知つて、それまで自暴自棄になっていた自分の在り方を捉え返すのである。

その手記から少し引用してみるが、自分自身の生き方と対比して、彼の考え方と共感できるのは、なにも私だけではないだろう。「子は親を選べないし、親も子を選べないように、人生には多くの逃げることのできない出会いがある。一刻一刻の限りない出会いなど、すべて逃げられないものばかりである。そうであるならば「被差別部落民」という出自も、逃げることのできない出会いとして、むしろ積極的に、自分にとって、必要なこととして、「出会えて良かった」というほどに、人生の糧としてゆくべきだった。…自らを前面に押し出していくこの生き方こそまさに『被差別部落民』としての誇りをもつて生きることであり、「被差別部落民」としての人間としての尊厳があるのだと思う。」

逮捕された当初は、死刑を望んでいた木村さんも、弁護士や麦の会の人々との交流の中で、「死んで償う」のではなく、「生きて償う」ことがほんとの贖罪の道なのではないかと思うようになつたという。死刑制度の是非や、差別の構造といったシステムティックな事を云々するより、人間とはいひかに生きるべきかといったメンタリティーを問題にする木村さんの考え方には、われわれは強く引かれたのである。

サークルも死刑制度を巡って、賛否を確認していくようなものにはしたくなかったし、自分たちがサークルを通じて開かれなかつたら何も面白くないとも思つていたので、木村さんの手記をテキストにしていくことにしたのである。

しかしそういう経緯を経たにせよ、予期される事態として、Aさんがサークルを通じて位置付かないのではないかという危惧もあった。しかし当日の討論のなかで、彼の主張もある程度盛り込んだ上で、木村さんの手記をみんなで確認し、「生き方」を共有できればいいと私は考えていたのである。

そしてサークル当日、われわれはAさんに対する配慮もあって、死刑の存否そのものをあえて問題にしなかったのだが、それに対して昔から市民運動に関わり、一時ワークショープメンバーでもあった仲間から、なぜいまさら死刑問題をやるんだ、左翼だったら死刑反対は当然じゃないか、という提起がなされた。

それに対してわれわれは、死刑をする・しないだけを問題にするより、そういった制度自体を超えていくような発想を、問題にしていこうと応えたのであった。死刑制度絶対反対を掲げる彼とAさんの確執は、誰がみても明らかだったからである。

結局討論はそのまま死刑制度を巡って、平行線のままおわってしまったのだが、これをどう捉え返すのかでワークショップの仲間と討論になった。

当初われわれはAさんの問題意識を生かしていこうと、模擬裁判の形式でサークルを組織していくはずだった。Aさんも当然そういうもののとしてサークルへの参加を考えていたのだ。木村さんの手記をテキストとして使うという話は事前にAさんにも話していて、私は了承を得ていたつもりであった。

サークル後、私に対してもAさんは、「話がちがうじゃないか。僕は自分の意見が無視された気持ちだ。」と怒りをあらわにしていたが、私も本当にその通りだと思った。いくら開かれたサークルを標榜していても、そこでのメンバーの思いに対しても応えていくことができなくては、それこそ死刑を巡る「学習会」みたいになってしまって、決して価値を発信していくことにはならない。

要するに木村さんの手記を事前にみんなが読んで、その妥当性を確認しあうサークルが組織できていれば、な

にも問題はなかつたのである。問題だつたのは、その木村さんの手記という「真理」がサークルの基調になつてしまつたことであり、われわれがAさんをも含めて、「真理」たるサークルの基調を押しつけてしまつたことにあら。

とは言つても、サークルの企画から当日の討論に至る経緯を思い起こしてもらえばわかるが、われわれは決してAさんやほかのメンバーに対し、閉塞したドクトリンを押しつけようとしたのではなかつた。あくまでもAさんをも含めて、「アウフ・タクト」を意義あるものにしていこうとずっと考え続けてきたのであつた。しかし、如何せん舞台の上から平場を見るというのか、常に「組織しなければ」という発想で思考しているがゆえに、どうしても平場から発想していくことに抵抗を感じてしまうのだ。

それならいっそ全部まかせてみたらどうだらうか。こんな意見がどこからともなく出された。そしてそれ以降、わが「アウフ・タクト」ではサークルメンバーが主体的にテーマを出し合い、テーマを出したメンバーが、責任をもつてサークルを運営していくことを確認していくのである。

自分が「お客様」として参加するのではない、「アウフ・タクト」メンバーとしての自覚を持ち、価値を共存するべく、各々が主体的に取り組んでいこういうものだ。

今ではワークショップ以外の定期的なサークルメンバーの数も増えていて、例えば最近のサークルでは、なんとワークショップメンバーの倍の仲間によつてサークルが行われるまでになつた。このようにわがセクションでは、サークルの実体化を、糾余曲折を経ながらも徐々に成しつつあるといえるのだが、何事も順風満帆というわけではない。

それは米兵の暴行事件を契機に盛り上がつた、沖縄人民の運動が高揚してくる中で、サークルでも沖縄問題を取り上げればいいのでは、という提起が他のセクションから成され、われわれがそれに反発するという形で問

題になつた。

当時私は、「アウフ・タクト」が「自由な個人」の共同体として、活発な討論もでき、メンバーの数も徐々に増えてきているという自負があった。だから沖縄の運動が盛り上がっているからといって、一方で12・17集会の動員戦を担つてしているのだから、サークルまで「右にならえ」ではしようがないのではないか、現に稼働しているサークルの能動性を重視すべきで、動員戦とサークルは別問題だ、と反論していくのである。

このような討論を通じて見えてきたことなのであるが、確かに「真理」の強要ではない場として、この間サークルは実体化してきている。かといって全く「真理」などない、あくまでもサークルメンバーの主体性に任せる、という発想も相対的な不価値論に陥つてしまふのではないだろうか。少なくとも「アウフ・タクト」メンバーの中には、サークルは面白いけど、集会には行けないという人もいて、そういった構造は早晚超えなければならないと思う。

そういったなかで12・17集会に向けては、集会への呼びかけをサークルの場で行っていくことにした。「サークルを通じて、知的好奇心だけを満足させるのではなく、社会的に価値を発信するためアクティブに行動していくこう！」このように「アウフ・タクト」として集会に参加していく気運をつくっていくことは、決して動員の手段には成りえないのではないだろうか。

それは「自由な個人」のサークルから、「自由で目的意識をもつた活動する」サークルへの前進をかち取ることであり、社会矛盾に対してもう向き合うのかを、ともに共有しあい、新たなる価値を創造していくことにきっと繋がっていくはずだ。そして私自身もそこでの価値の発信者として、ともに学び・学ばれる関係をつくっていきたいと思う。

一、逃げ場のないオルグを超えて

さて価値の共軸といったときに、現実に一番問われるのが、個別の対象との討論であろう。最近ではペア・オルグというように、メンバー同士で補い合う関係が割合つくれてきていると思うが、それでもなかなか相手の問題意識に踏み込んで話すことが出来ずに、囁み合わない討論になってしまることがしばしばある。

これも12・17集会を巡って、私と討論している友人のBさんとの間で問題になつたことであるが、私の提起が、妥協を許さないような感じで彼に受け取られてしまい、彼をして「私は逃げ場を失いました。」と言わしめてしまったのである。

キリスト者であるBさんは、クリスマスを目前に控えていて、とても集会にはいけない、と前から話していた。しかし私はいつもより多少強引に集会の意義を語り、参加を促したのである。当然それでも彼のキリスト者としての立場をわきまえて、礼拝の邪魔にならない範囲でなんとか参加できなかを訴えてきたつもりであった。

これは後でBさん本人が言っていたことだが、実は十七日は通常の礼拝以外に予定は入っておらず、スケジュールの上で集会に来られない根拠は無かったのだそうだ。しかし彼は必要以上に私の提起に対し難色を示し、参加を拒みつづけた。

何回か会って討論をしたのだが、はじめはなぜBさんが私の提起を拒み続けるのか全く判らなかつた。というよりも、とにかくスケジュールを空けて集会に来てくれ、僕らはこの間ずっと一緒に闘つて来たじゃないか、その成果を無駄にしないでくれ、と一辺倒な提起に終始していたのである。

そしてそれに対するBさんの答えが、「貴方の意見はもつともです。集会の意義も判ります。ついに私は逃げ場を失つてしまつたようです。しかしあたしは今回の集会には行きたくないのです。」というものだったのである。

私は、その時になつて始めてBさんの思いをないがしろにしてしまつたことに気が付いた。私は極力彼の問題意識に踏み込んで、そこから立ち上げていこうと思っていた。しかしそこで私が彼に語つていく言葉は、自分の思いの押しつけであり、何の普遍性も妥当性も無かつたのである。

このような、相手に有無を言わさずに自分の意思を強制していく在り方を、われわれはこの間変えようとしてきた、筈であった。しかしどうしても集会に来てほしい、という気持ちが強かつた分、相手の思いを受け止めることが出来なくなつてしまつたのだ。

集会の前日になつて私はダメもとで、意を決して彼に電話をかけてみた。そしてこれまでの関わりを素直に詫び、私がなぜ明日の集会に行きたいのかを聞いてもらいたいと切り出した。そして私は社会的な存在として、社会に対して責任を持っていきたい。だから沖縄の人達の呼びかけに応えたい旨を話した。

これに対してBさんは、「社会的な責任は私自身も考えていかなければならぬと思います。」と集会への参加を快諾してくれたのである。つまりやつと彼の思いに分け入ることができたという訳だ。

そこで私が感じたことは、組織者然として相手に関わるのではなく、もっと自然体でつきあい、フランクにコミュニケーションすることができれば、関係がもつと深まつてくるということだ。

それまで対象との合意を問題にしていこうとする、とにかく相手との接点を摑もうと、あれやこれやの策を弄してしまつていた。しかし実際にはそのような論理性に真理などなく、例えばそれは人間解放にむけた決意であつたり、社会に対する責任であつたりと、どこまでも人間のメンタリティーを共有する問題としてあるということだ。

そして討論を現実に作っているそこで両者の関係こそが、現実に価値を生み出しているのではないだろうか。最近木田元の『反哲学史』を読んでみたのだが、そこでのソクラテスに関する記述のなかで、彼自身は真理なるものを何も知らず、ただ対話の中で相手の知的な成長に関わる旨が言われていて、そのような関わりが廣松の言うフュア・エース・フュア・ウンス規制に繋がっていくのではないかと思つた。

ソクラテスの弁論術を産婆術ともいふが、例えばプラトンの『メノン』などで描かれているソクラテスは、『ソクラテスの弁明』などでソフィストを論破するあのシニカルな論客ではなく、メノン青年とともに「徳」（アレティー）とは何かを探究する一学徒である。

「徳とは教えられるか」というメノンの問いに対しても、ソクラテスはそもそも「徳とはいつたい何であるか」を問題にする。そしてメノンの提出する答えの矛盾を指摘しつつ、ついに行き詰まり（アポリアー）に陥らせ、そこからいっさいのドクサを排した「真理」を探究する途につくのである。

相手の思い上がりや、知ったかぶりに対しては、辛辣で容赦なく批判の刃を突きつけるが、ともに「真理」を探究していく「同志」に対しては、どこまでも真摯に己をさらけ出す。ちょっとプラトンの脚色も入っているかも知れないが、そんなソクラテスの姿勢にはおおいに学ぶべきところがあると私は思う。

つまり価値の共軸ということは、共に「真理」を探究する「同志」を見いだしていく過程なのである。そして辛辣かつ真摯に相手の問題意識に踏み込みつつ、どこまでも価値を共有していく嘗為を通じてしかその実現はありえない。

Bさんとの関わりについていえば、ダイアローグを通じてもっとフランクにお互いの思いを出し合い、ともに「真理」を探究する「同志」として、これからも価値を発信し合っていきたいと思う。

終わりに

以上サークルと個別の討論を中心に、価値の共軛をテーマにして昨年のわれわれの実践を捉え返してきた。サークルの運営をめぐる問題については、秋のワークショップで提起された、サークルからワークショップ・メンバーヘの結集の問題をどう位置付けていくのかについて、未だにセクション内部で討論を続いている最中であり、今年の継続課題である。

いずれにせよがセクションの問題意識としては、ワークショップやサークルのメンバー同士の交流を今後とも深め、価値を発信していくような関係を、広く・深く拡げていくことに尽きると思う。

九六年の年頭にあたって、わが地区の百人体制という課題をも視野に入れながら、果敢に自己を越境する闘いに立ち上がり、未来をこの手で掴むべく、奮闘する事を最後に宣言して結語にかえたい。